

特別なニーズのある児童を対象とした 自尊感情を高めるための支援方法に関する研究

川村 万裕

I 問題

通常の学級に在籍する特別なニーズのある児童は、障害特性ゆえの社会性の乏しさや言動、周囲の理解不足により、周りからの肯定的な評価を受ける機会が少なく、自己評価や自尊感情が低下している児童が少なからず存在している。

自尊感情は自己全体に対する感情的評価であり、自己評価はある領域・能力に関する認知的な評価である。Harter (1993) によると、自尊感情の程度は、重要な領域のコンピテンスの大きさと重要な他者からの承認の大きさから予測できるという。また、児童期後半の自己評価機能は、児童が自己に関して肯定的な評価をするほど、他者による評価の影響を受けやすいという (中山, 2007)。

また、このような自尊感情を高めるための支援は、特別なニーズのある児童の近くで活動する特別支援教育支援員であれば、普段の一斉指導の場面からは見つけられない、対象児の姿を見ることができ。

本研究では、対象児がどのような領域を重要視し、どの点を認めてもらいたいと考えているのかを探りながら、それに即した肯定的な他者評価を継続して行うことにした。このことで、まず対象児自身の自己評価が高まり、自信をもって生活する中で自尊感情が高まるということを検証した。また、評価を与える他者を対象児が信頼していることが必要であると考え、そのことにも配慮した支援方法を探った。

II 目的

特別なニーズのある児童を対象として、肯定的な他者評価を与えることによって児童の自尊感情の改善を図った。その成果から特別なニーズのある児童の自尊感情を高め維持するための支援方法を検討することを目的とした。

III 方法

1 対象児

小学校の通常の学級に在籍する小学 6 年男児。ADHD と HF-PDD の傾向があると診断されていた。活動の切り替えや集団活動への参加の難しさ、級友とのコミュニケーションの難しさがみられた。自身に対して否定的な発言をすることもあった。

2 手続き (図 1)

1) 観察期 (2007 年 6 月～2008 年 3 月)

週に 1～2 回の計 22 回、対象児の在籍する学級で観察を行った。主に対象児の「学習の様子」「級友とのかかわり」「担任とのかかわり」「筆者とのかかわり」を観察・記録した。観察時には、対象

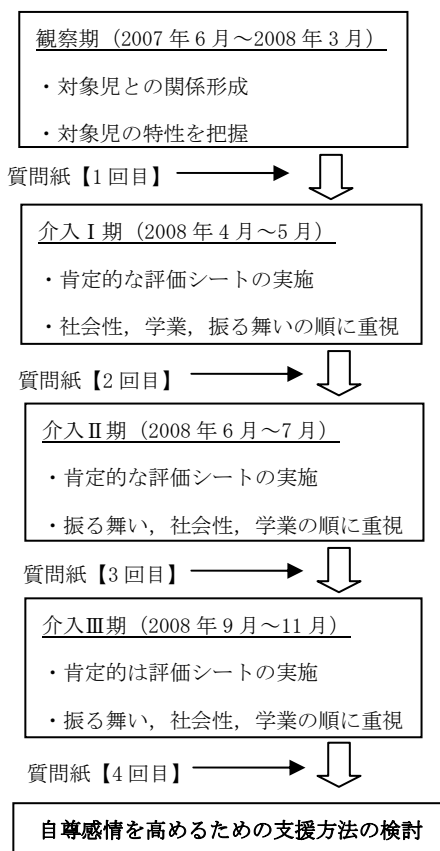


図 1 観察期～介入Ⅲ期の手続き

児と共に活動をし、対象児が困っていること、理解が難しいことなどを伝えたり、集団活動へ参加していない時に活動へ促したりした。2008年3月には学校生活アンケート・心の健康チェックと日本版自己認識尺度を実施した。

2) 介入Ⅰ期～介入Ⅲ期（2008年4月～11月）

週に1回の計20回、対象児の在籍する学級で観察・支援を行った。観察では「肯定的な評価シートの受け渡し時」「質問紙検査時」の様子を観察の観点に加えた。支援では、対象児が重視している領域に対して、筆者が肯定的な評価を記した「肯定的な評価シート」を放課後対象児に渡すことを加えた。各期の終わりである5月中旬、7月中旬、11月下旬に学校生活アンケート・心の健康チェックと日本版自己認識尺度を実施した。

また、日本版自己認識尺度の「重視している領域」の変化に応じて、各期での重点的に記述する内容を変えた。また、対象児の反応や受け渡し時の様子を観察し、適宜、対応した。

IV 結果と考察

1 児童が重視している領域

計4回の日本版自己認識尺度の結果、重視している順位の変動はあったものの、「学業・社会性・振る舞い」の3領域を重視していた。この3領域に焦点を当て、児童を観察し肯定的な評価をすることが効果的であると考えられる。

2 「自己評価」と「他者に映る自己評価」の変化

自己評価は対象児が重視している領域では肯定的に変化した。「学業領域」と「社会性領域」が肯定的に評価されており、「振る舞い領域」においても、肯定的に評価した項目はなかったものの、観察期に比較すると否定的な評価は少なくなった。重視していない2領域では肯定的な変化は見られなかった。「他者に映る自己評価」は、観察期の「他者に映る自己評価」は全体的に低かったが、「肯定的な評価シート」導入後の介入Ⅰ期からは高まりをみせた。特に対象児が重視している「学業領域」と「社会性領域」が高まった。このことから、筆者による「肯定的な他者評価」が対象児に影響していたと考える。運動領域は「他者に映る自己評

価」が肯定的に変化した。自己評価では変化しなかった。「肯定的な評価シート」により重点的に肯定的に評価した領域の自己評価が高まったと考える。対象児が重要視している領域への肯定的な他者評価は、児童のその領域の自己評価を高めるために効果がある。

3 自尊感情の変化（表1）

「自尊感情」は観察期から介入Ⅱ期の間では肯定的な評価に変化しなかったが介入Ⅲ期では2項目が肯定的な評価をしていた。これは Harter (1993) の述べていたように、重要な領域に対する肯定的な評価と他者からの承認によって自尊感情が高まったと考える。自尊感情を高めるためには、重視している領域に対して児童自身の肯定的な評価が必要であり、その自己評価が高まるには他者からの肯定的な評価が必要である。

4 支援方法の検討

1) 対象児の特性に合わせた観点・方法

対象児が重要視している領域に観点を置き肯定的な評価をすることが効果的である。また、その評価の与え方は、児童に認識されなくてはならないので、聴覚的な情報処理が弱い児童には、視覚的に情報を読み取りやすい方法で評価を与えることが効果的であると考えられる。

2) 「他者」への意識

自分以外の「他者」に対する理解が不十分な児童が「他者に映る自己」を意識するには今回使用した「他者に映る自己評価尺度」などの質問紙を行うことで「自分が他者にどう評価されているか」という意識を高めることができると考えられる。

3) 肯定的な他者評価の重要性

自尊感情を高める1つの要因として自己評価に注目し、継続して肯定的に他者評価をすることで、自己評価を後押しすることができる。高い自己評価を維持して生活していく中で、自尊感情が高まると考える。肯定的な他者評価は、自尊感情を高める上で重要である。また、Hozaら(2004)はADHD児において、抑うつから身を守るため心理的に防衛しようとする働きが、彼らの自己評価を歪め「他者評価」よりも高い「自己評価」を生み

表1 自尊感情尺度の各項目の得点の変化

	観察期	介入Ⅰ期	介入Ⅱ期	介入Ⅲ期
項目a	1	1	1	2
項目b	3	3	3	4
項目c	1	3	2	3
項目d	1	1	2	3
項目e	1	1	3	4
項目f	1	1	1	1

注1) 項目の内容

- 項目a: 自分にかなり満足している。
 項目b: 毎日の生活にじゅうぶん満足している。
 項目c: 人間として自分自身に満足している。
 項目d: 自分のような子どもが好きだ。
 項目e: 今のままでとても幸せだと思っている。
 項目f: 自分のやりかたは素晴らしいと思っている。

注2) 各得点の説明

- 1: 当てはまらない 2: あまり当てはまらない
 3: どちらともいえない
 4: 少し当てはまる 5: 当てはまる

出していることを指摘し、肯定的錯覚バイアス (positive illusion bias) と呼んでいる。肯定的錯覚バイアスは彼らの自己の修正や改善を妨げる要因となり、その結果、二次障害を引き起こす可能性もあるとしている。

肯定的な評価をする存在ができ、自己評価や自尊感情も高まり、防衛する必要がなくなると肯定的錯覚バイアスが減ると考える。児童の自尊感情を高めるためだけでなく、対象児自身の自分を振り返る力においても、肯定的な他者評価は必要である。

4) 特別支援教育支援員の可能性

特別なニーズのある児童に寄り添うことができる特別支援教育支援員は、児童の行動をきめ細かく観察することができ、領域に即した評価をしやすいと考える。対象児とも信頼関係を築き易い立場であり、対象児の「重要な他者」、心理的な支えになる可能性がある。

V 結論と今後の課題

本研究の結果から、自尊感情を高めるために以下の支援方法が有効であると考えられる。

- ①対象児の重要視している領域に対して肯定的な評価をする。
- ②対象児の特性に合わせた手続きで肯定的な評価をする。
- ③日本版自己認識尺度を行い、「自己」や「他者」について振り返る。
- ④対象児の「重要な他者」になる。
児童が重要としている領域に対して、肯定的な

他者評価を与えることで、その領域の自己評価が高まる。児童自身が重要としている領域に対して、高い自己評価を継続して持つことで自尊感情も高まる。また、「自身を肯定的に評価している」存在を対象児が認識することは、児童にとって「心の支え」にもなると考える。

他にも、特別なニーズのある児童に対する支援は、職員全員の協力が必要であり、学級の他の児童に対しても支援する必要がある。

今後の課題については、まず、「肯定的な評価方法の仕方」について検討が必要である。本研究では児童の特徴として「聴覚的な情報の処理能力が弱い」ということで目から情報を読み取ることのできる視覚的な教材を使用した。高機能自閉症やADHDの児童に指示する際や情報を提供する際は、黒板に文字で表記したり、プリントを作成し用いたりすることは一般的にもされていることではあるが、言葉かけによる聴覚的な肯定的な評価と手紙やシートによる視覚的な肯定的な評価では、児童の認識の差が有るのか比較検討する必要がある。また、本研究で取り上げた自尊感情は自尊心、自己評価、自己価値観、自己肯定感など言葉の定義づけにおいて曖昧だけでなく、自尊感情と自己評価の関係についてもさまざまな説がある。今後も他者評価・自己評価との関連を検討する必要があるだろう。

文献

- Harter, S. (1993) Causes and consequences of low self-esteem in children and adolescents. In R. F. Baumseister (Ed.), Self-esteem: The puzzle of low self-regard. New York: Plenum.
- Hoza, B., Geders, A. C., Hinshaw, S. P., Arnold, L. E., Peleham, W. E., Molia, B. S. G. (2004) Self-perception of competence in children with ADHD and Comparison Children. Journal of Consulting & Clinical Psychology, 72(3), 328-391.
- 中山留美子(2007) 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程: 自己愛における評価過敏性、誇大性の関連の変化から. パーソナリティ研究, 15(2), 195-204.